

### 島前合宿企画にあたり

この島前合宿の企画は、私が大学に入学し半年以上が経過しているころ、私が帰省した時に地元の高校生に法政大学の名前が知られていなかったことから始まった。

当時の高校 3 年生ですら、東京の大学は東大・早稲田・慶應しか知らず、他の大学のことはほぼ知らない状態だった。そんな状態では、進路を決断しようにも選択肢が少なく、必然と進路の幅が狭まり、将来の可能性まで狭めてしまうことになる。同じように、中学生も高校卒業後の進路のことを一切考慮せずに高校を決めている。

そこで、合宿に参加した大学生との交流を通して、大学とはどんな場所なのか、大学進学とは何を意味するのか学び考えてもらい、進路の幅を広げるきっかけとしたい。地元の魅力を大学生から話すことで、中学生に地元の魅力を知ってもらい、将来の地域を担う人材を志してもらえとなお良い。

大学生にとっても価値のある合宿にするために、高校生とのディスカッション、中学生のファシリテートを行ってもらおう。大学生には、これらを大学生活及び、就職してからも使える能力として、この合宿で学んでもらいたい。さらに、地域の魅力・課題を発見する能力も同時に身につけられるようになってもらいたい。

### 各プログラム

#### 1. ヒトツナギ交流会〈9/7(日)〉

※元々のプログラムでは、高校生を対象にカフェ形式で交流会を行い、その中で高校生のやりたいことを深めていく趣旨のものだった。しかし、ミーティングも兼ねて早めに帰省しヒトツナギの活動に参加したところ、このヒトツナギの活動が危機的状況にあることに気づき、研修先の先生方と話し合った結果、対象を『島前高校の生徒』から『島前高校ヒトツナギ部』へとシフトした。内容も、今後のヒトツナギのあり方を大学生と地域の人と共に考えていくという趣旨に変更した。

内容は、①2009年度観光甲子園グランプリ受賞時のプレゼンを行い(10分)、②ヒトツナギ部員のヒトツナギに対する想いを述べた後(10分)、③地域の方が抱えるヒトツナギへの想いと部員に対しての要望を交えた意見交換会(40分)の3つを行った。③には大学生も加わり、部員・大学生・地域の方がそれぞれ3組に分かれ、一組5～6人になるように行われた。これを3回繰り返すことで、地域の方が都合の良い時間に参加できるよう配慮した。また、3回とも参加される地域の方には、ヒトツナギ部員全員の想いが聞けるようになっている。

結果、このプログラムを行ったことで、ヒトツナギ部員はヒトツナギへの理解を改め、新たに「自分たちらしいヒトツナギを創っていこう」と、モチベーションを上げることに成功した。そもそもヒトツナギ部は、部活動としては一年半しか活動ができず、1年生は半年でヒトツナギの理念を理解し、2年生は半年で1年生への引き継ぎを行わなければならない。その結果、部員のモチベーションにも差が生まれ、ヒトツナギの出来にまで影響

してしまった。しかし、今回のプログラムにより、部員は自らの反省点を踏まえ、ヒトツナギを自分たちの手で創っていきたいと意欲をあらわにした。さらに地域の方々や大学生とヒトツナギの魅力・問題・改善点を共有することで、部内のみではなく地域の方々のモチベーションの向上にもつながった。

大学生にとっても、高校と地域が深くかかわっているヒトツナギの活動を理解することで、大学生として今後どのように地域と関わっていけばよいのか考えるきっかけになったと思う。

反省点として、今回は企画が急ごしらえのものとなってしまう、大学生同士、ヒトツナギ部内、そして地域の方々への情報共有が上手く行えていなかった。そのため、来年以降の合宿でもヒトツナギ部をメインに交流を行い、大学生が地域と深く関われるようなプログラムにすることで、ヒトツナギ部を介し情報共有をスムーズに行いたいと思う。

## 2. 西ノ島中学校 出前授業〈9／8（月）〉

今回は、「大学生に色々と話が聞きたい」という中学生の要望が多かったので、昨年とは形を変えて、インタビュー&他己紹介を行うことになった。このプログラムでは、中学生には人に質問する力を身につけてもらうこと、大学生には中学生の質問を引き出す力を身につけること目的としていた。

内容は、まず①授業の概要説明を全体に行い（5分）、②アイスブレイクを兼ねてチーム（大学生：中学生＝1：2）を作り（10分）、③チームごとに中学生から大学生へ質問を行い（20分）、④質問した内容を踏まえてどんな大学生かを中学生が発表し（30分）、⑤休憩をはさんだ後、もっと話を聴きたい大学生のところへ中学生が行き（この時、大学生からも質問可）（15分）、⑥近藤から中学生へのメッセージを述べ（5分）、⑦中学生・大学生から感想を述べてもらう（10分）流れで行った。

しかし、今回のプログラムにおける中学生の成果報告はまだ聞けておらず、大学生側も負担の大きなものとなってしまったため直接的な成果は得られなかったように思う。中学生が予想以上に緊張してしまい用意していた質問もできず、大学生も質問を引き出すことに苦勞し、質問しやすい雰囲気づくりはできていなかった。

これを反省点とし、中学生はどのようにすれば緊張せずに質問できるのか、大学生はどのようにすればより良い雰囲気が作れるのか、今後考えていってもらえたらと思う。

しかし、私個人の目標は少しではあるが、達成できた。中学生3年生のほとんどは、進路のことを気にしたことが無く、「島前高校を卒業したらそのまま地元で働けばいい」という生徒が多かった。しかし、このプログラム後はそのうちの数人が「大学行って、色々学んでから地元で働きたい」という意思に変化した。授業が終わった後に、大学生に「大学ではどんなことが学べますか」等の質問をする生徒も現れ、高校卒業後の進路のことを以前よりも真剣に考える生徒が増えたように感じた。

### 3. 隠岐國学習センター 夢ゼミ

今回の夢ゼミでの目的は、これから何かに取り組むときに必要となる「Want (したいこと)」「Can (できること)」「Need (求められること)」の3つを学ぶことを、高校生と大学生の共通の目的とした。大学生にはさらに、グループワークのファシリテーターとして動いてもらうことで、ワークショップなどの進行能力を学んでもらうことも目標として掲げた。

内容としては、①学部紹介・大学生自己紹介から始まり、②アイスブレイクも兼ねて個人の「Want」をグループ内で出し合うことを行った。そのまま③「Can」をグループ内で出し合い、④センター長の豊田さんから「Need」の必要性について話していただいた。休憩をはさみ⑤今度は個人ごとに自分にとっての「Need」を考え発表してもらった。最後に近藤及び、豊田さんから⑥「Want」「Can」「Need」が重なるような取り組みをする大切さについて話し、⑦高校生、大学生数人から感想をもらい終了した。

夢ゼミの成果として、高校生、大学生共に「Need」の大切さについて考えてもらうきっかけとなった。「今までは自分のしたいことを中心に様々なことに取り組んできたが、今後は人に何を求められているのかも考えながら、取り組んでいきたい」と、高校生、大学生共に聞こえてきており、とてもやりがいのあるものだったと実感している。

ただし、反省点も多かった。直前までプログラム内容の変更が行われていたため、大学生に、今回の夢ゼミの趣旨を十分に伝えられていなかった。さらに、プログラム中もタイムテーブルの変更等が行われたため、ファシリテートを任されていた大学生がどのように進めていけばよいのか分からなくなってしまった。これは大いに反省すべき点である。特に、夢ゼミには学習意欲の高い高校生が50人も参加している。質、量ともに各プログラムの中で最も大きなプログラムとなるため、他のプログラム以上に情報共有・リハーサル等の準備が必要となる。

しかし、「Want」「Can」「Need」の3つはこれから様々な場面で活用できると思うので、反省も多かった分、収穫も多かったプログラムとなった。

#### 全体を通して

今年の合宿の良かった点として、大学側からの参加が1、2年生のみとなったことである。大学に入ってやりたいことが見つからない人、今取り組んでいる企画を今後どのように展開していくか考えている人にとって、今回の合宿は次の一歩を踏み出すきっかけになったように思う。中学生や高校生にとっても、昨年の3、4年生のみのときよりも歳が近いので、フレンドリーな関係が築けていた。反対に、それが物足りないと思う高校生もいたので、来年は1～4年生をバランスよく集めていきたい。

反省点としては、昨年と同じく、研修先とのプログラム調整、宿泊先の確保、移動の手段や時間の調査も、私一人で全て行ってしまったことだ。本来は、2年生に引き継ぎを兼ねて調整のいくつかを任せる予定だったが、忙しい学生が多く、任せることが出来ない状

況にあった。

そのため、今後は組織を作り、組織単位で島前の各研修先との連絡を取れるようにしようと思う。ゼミを中心として継続するのか、サークルとして継続するのかは未定だが、今後も、島前と現代福祉学部の繋がりを維持し、現代福祉学部の魅力発信と島前の教育の発展に携わっていきたい。